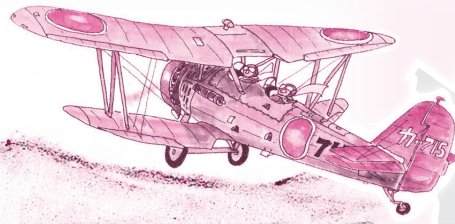


予科練 平和記念館だより



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍に関するお話しや写真を集めています。ご存じの人はぜひご一報ください。

空 気がりと響くような寒さが続いています。

皆さんは『フキヨウノハナ』という言葉をご存じでしょうか。音だけを聞くと、この厳しい時代にも負けず頑張る人たちのことかなと思います。が、実は漢字では『不香の花』と書き、『雪』の呼び方の一つです。香りのない無数の小さな花が空から舞いおりてきて、見渡す限りの風景や音さえも白く包んでいく。その静けさを思うとき、「太郎を眠らせ／太郎の家に雪ふりつむ」という三好達治の『雪』の一節を思い出す今日このごろ、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

今月号は、阿見町出身の予科練習生の遺品をご紹介します。

●阿見町の予科練習生 木村孝正さん

海軍飛行予科練習生の教育機関である土浦海軍航空隊（現陸上自衛隊武器学校）には全国からたくさん少年が集まりましたが、町内からも志願した人がいました。そのうちの一人、木村孝正さんは、現在の阿見小学校近くにあった『木村パン屋』の三男として、大正14（1925）年9月10日に生まれました。阿見

尋常高等小学校を卒業し、泳ぎが得意で人に好かれる元気な少年だったそうです。飛行機乗りにあこがれていた孝正さんは、昭和15（1940）年12月、15歳で乙種第15期飛行予科練習生として土浦海軍航空隊に入隊、約2年の後卒業して筑波海軍航空隊（現笠間市）にて飛行訓練を受けたあと、南方の戦場へ行くことになりました。

昭和19（1944）年4月1日、孝正さんが操縦する艦上爆撃機『彗星』は、サイパンを飛び立ったあとエンジントラブルを起こし、ガム付近の太平洋上に不時着。孝正さんは同乗の予科練出身の搭乗員とともに帰らぬ人となりました。享年19歳。彗星のように駆けぬけた人生でした。

孝正さんの遺品は、実兄の忠正さん（栃木県在住）が大切に保管なさっていたもので、息子さん夫婦がわざわざ栃木県より持ってきてくださいました。旅行トランクや予科練時代のアルバム、教科書、辞書、ノートなど貴重な資料



▲木村孝正さん（昭和17年撮影）

50点が町に寄贈され、予科練平和記念館にて展示されるのを待っています。まるで建設に合わせるかのように何十年ぶりかで里帰りした遺品には何か縁のようなものを感じますし、どれも保存状態がよく、ご家族のお気持ちの深さがうかがえるようです。

その中の1点、孝正さんが予科練習生2年次の昭和17（1942）年につけていた日記『朝日日記』をひも解くと、当時の厳しい訓練生活を垣間見ることが出来ます。おもしろいのは、「家に行くついでに、饅頭をやらずにクリーム何とかと言う菓子を作っていた。小豆がない様だ。此れは父ちゃんが家で全くよい」など、お菓子屋さんの息子らしい記述があるところ。この年の2月には雪の日が5日間もあったようで、「今朝は又寒い。よく見ると雪が降っていた。」「今朝は冷えて非常に手が冷たくてどうしようも



▲予科練習生時代の日記帳（右）と飛行練習生の時のノート（左）

なかった。」と、木造宿舍の底冷えする寒さを記しています。しかし、日曜日の外出の日には雪もなんのその。「二月一日 日曜日 雪の日やつどふ声する家の中」。隊から解放されて、雪の中急いで家に帰り着いたときの気持ちに詰まっています。家族の待つわが家は甘いいい香りがして、日ごろつらい訓練に追われていた17歳の少年の疲れはほどけように癒されたことでしょう。この時ばかりは、雪も実家の暖かさを引き立てる小道具のようです。

三好の雪は太郎ばかりではなく次郎も眠りにつかせます。「太郎を眠らせ／太郎の家に雪ふりつむ 次郎を眠らせ／次郎の家に雪ふりつむ」。短い言葉でしんと雪降る夜の情景を切り取った三好の心の内には、陸軍軍人として中国へ渡ったときの経験が深く根を下ろしているのではなにかと言われています。読む者の心の中にさまざまな情景が広がるのは、もしかしたらそのことも関係しているかもしれません。ともあれ、冬しか会えない香りのない花を少ししめるよう、皆さんもどうぞ身も心も暖かくしてお過ごしください。